

文語歌曲

廣瀨中佐（文部省唱歌）

谷田貝常夫

文語歌曲

廣瀨中佐（文部省唱歌）

谷田貝常夫

一、 轟く砲音、飛來る彈丸。／荒波洗ふ デッキの上に、／
闇を貫く 中佐の叫び。／「杉野は何處、杉野は居ずや」。

二、 船内隈なく 尋ぬる三度、／呼べど答へず、さがせど見えず、／
船は次第に波間に沈み、／敵彈いよいよあたりに繁し。

三、 今とはボートに 移れる中佐、／飛來る彈丸に 忽ち失せて、
旅順港外 恨みぞ深き、／軍神廣瀨と その名残れど。

大戦後には、小學校にて習ふことなき歌なれば、この歌知らぬ世代も多からん。時は明治時代の日露戦争の一實景なり。明治の中頃、露西亞帝國は、滿洲南部への進出を企て、大清帝國の一部を植民地化し、大韓帝國にも侵掠の手を延ばし始めたり。そを知りたる日本は、幕末に露西亞軍艦が對馬に不法上陸滞在せる事實をも考慮の上、明治三十七年（1904）年露國との國交を斷絶し、旅順の攻撃を開始せり。ウラヂオストックには巡洋艦隊常駐し、旅順には露國の強力なる太平洋艦隊駐留したれば、この戦力に本國よりアフリカを迂回して参戦せんとする世界最強のバルト海艦隊加はれば、日本は國自體、危殆に瀕するに至るは必至ならん。さればと旅順港を封鎖せんとして小型船を港口に沈める作戦とることとせり。その第二陣四隻の一つの指揮をとれるが、この歌に出づる廣瀨中佐なり。十八名の乗組みたる四千トンの福井丸、前進の途中にて敵驅逐艦よりの魚雷を受けたり。船より撤退せんとするに、自爆用の爆薬に點火せんと船倉に降りに行きたる部下の杉野孫七見當らず。さればと廣瀨中佐、福井丸に戻りて三度見廻りたるが見當らず、己むを得ず救命ボートに乗移らむとせる瞬間、露軍の砲彈、中佐の頭部を撃ち抜きたり。三十六歳にて壯烈なる戦死を遂げたる、部下思ひにてもありし廣瀨武夫、即日中佐に昇進せらるると共に、神格化せられて、日本初の「軍神」に列せられたり。

五日後、そが遺體は福井丸の側に浮びたれば、露軍、榮譽禮をもちて弔ひ、陸上の墓地に埋葬せりといふ。

日本にては、海軍兵學校在學時に通ひて昵懇となりし講道館の嘉納治五郎、その才能を高く評價したれば、廣瀨戦死の報に接して柔道四段なりしを六段へ昇段させ、男泣きに泣きたりと傳へらる。

また、セオドア・ルーズベルトと會見し、ホワイトハウスにて横綱土俵入りを披露したことある破天荒の横綱常陸山とは、なぜか義兄弟の盃をかはしたる仲なりせば、昇進せる横綱の土俵入り寫眞を送られたしとの廣瀨からの手紙に、寫眞と戦地慰問文の返信せるも、戦死により廣瀨見る能はず。その報を聞きて常陸山、これも聲をあげて夜を泣きあかせりといふ。

廣瀨中佐は、男を泣かす快男兒と言へむ。

遡るに、明治三十年、三十二歳の廣瀨大尉は露西亞に留學して露西亞語を學び、露國駐在武官となり

てペテルブルグに滞在したる折に露軍將校達に柔道を教へたりことあれば、將校連のあつまる社交界とも付合あり。さる晚餐會にて柔道話題にのぼりたるとき、大男の挑戦を受け、それを機轉にて投げ飛ばしたれば、傍らにをりし十八歳のアリアズナ・コヴァレフスカヤ、その武藝のすばらしきこと、廣瀨の男らしさに魅せらる。翌日廣瀨を尋ぬるに、日本の英國製軍艦の圖を見せて廣瀨、日本の軍艦の名前を説明し、その名前の優雅、美しさを讃へ、日本人は美しいものを好むといへり。命令による廣瀨歸國の際にはアリアズナ、おのれのイニシャル入りの銀時計を贈れり。二年後、廣瀨武夫戦死の報を聞きたるアリアズナ、長き喪に服したりといふ。

廣瀨武夫の壮烈なる最期は、歐州各國にても賞嘆され、露西亞からも哀悼の意が届けられたり。獨逸にては繪葉書まで作られたりといふ、タケオ・ヒロセは國際派的存在となりたり。

さらに、廣瀨は漢詩人なりといふ者あり、その押韻を説明せる者あり。文天祥の「正氣歌」を模して作れる廣瀨の「正氣の歌」ありて詩吟せる人達あり。終りの二聯を引用せば「誠哉誠哉斃不已／七生人間報國恩」と、誠の人達、赤穂浪士、楠正成、西郷と月照、橋本左内、吉田松陰、菅原道真を例にあげたる上にて、己れも斃れて後もやむことなし、七たびこの世に生れて國恩に報ゆとなす。

そこに對し、夏目漱石、沈める潜水艦に殉じたる佐久間艇長の遺書を名文としながら、廣瀨中佐の漢詩をば評して「吾々は中佐の死を勇ましく思ふ。けれども同時にあの詩を俗惡で陳腐で生きた個人の面影がないと思ふ。あんな詩によつて中佐を代表するのが氣の毒だと思ふ。・・・余は中佐の敢へてせる旅順閉塞の行爲に一點虚偽の疑ひを挟むを好まぬものである。だから好んで罪を中佐の詩に嫁（か）するのである。」とする。肯んぜらるゝ意見なり。

軍神に價する、人間性と言動を備へたる快男子なれど、安直なる漢詩をつくりたるが、廣瀨武夫中佐にとりては、珠（たま）に瑕（きず）なるか。